

令和元年度 市民クラブ行政視察報告書

1. 広島市

視察場所	広島市役所
視察項目	(1) 災害対応について (2) 「協同労働」モデル事業について
視察者	大内一郎、岡村行雄、関口武雄、村田文一
視察目的	(1) 広島市豪雨土砂災害の初動対応等について (2) 協同労働先進地の仕組みと運営について
対応者	広島市危機管理室 危機管理課 課長 児玉晃典 様 広島市危機管理室 危機管理課 主事 大幡議允 様 広島市危機管理室 災害予防課 課長補佐 吉村充弘 様 広島市経済観光局 雇用推進課 課長 山縣真紀子 様 広島市議会事務局 市政調査課 主事 正留圭一郎 様

広島市勢の概要（平成31年3月末現在）

- ・市制施行年月日 明治22年4月1日
(政令指定都市移行：昭和55年4月1日)
- ・人口 1,194,524人
- ・世帯数 565,792世帯
- ・面積 906.68km²
- ・令和元年度当初予算

普通会計	838,866百万円
(内 議会費)	1,670百万円
事業会計(9会計)	255,583百万円
企業会計(3会計)	148,226百万円
財産区会計(3会計)	12百万円
合計	1,242,687百万円

(1) 災害対応について

平成30年7月豪雨災害における広島市の対応と今後の取組について「新たな防災・減災対策」の展開を中心に報告を受けた。

①「避難所対策等検証会議」による検証（第1回会議 平成30年9月5日）

提言書の提出（平成30年12月27日）

②提言の基本的な柱

・「ひとりひとりが災害を我がことと思う意識」

・命を守るのは地域コミュニティの力

提言を踏まえた「新たな防災・減災対策」を展開

③地域の防災リーダーの養成等（養成講座・フォローアップ研修）

自主防災組織1,900地区、養成講座950名（目標）

④わがまち防災マップの作成支援

・地域の隠れた危険箇所の「見える化」

・災害に応じた避難場所

・公衆電話、AEDなど災害時使用施設情報

- ⑤地域における防災訓練の支援
 - ・初期消火訓練、避難訓練、避難所運営訓練、炊き出し訓練
- ⑥防災研修会等の開催
- ⑦防災ライブカメラの設置支援
- ⑧小学生防災キャンプの実施
 - ・炊き出し体験、防災ゲーム、ドラム缶風呂、宿泊体験
- ⑨被災地をモデル地区として重点的に取り組み、その成果を全市に展開
- ⑩避難誘導アプリの導入
- ⑪防災情報メールの配信地区の細分化
- ⑫災害教訓の伝承
- ⑬防災推進国民大会2020の開催

(2) 協同労働について

①事業の趣旨

超高齢社会が進む中、就労や社会参加を希望する意欲と能力のある高齢者を社会資源と捉え、社会の担い手として高齢者の「居場所」と「出番」を創出することが地域の活力維持の課題となっている。

また、少子化、核家族化に伴い従来、地域が有していた相互扶助や福祉、防犯といった機能が大きく低下しており、そうした機能を支える人材も不足している。

こうした中、「協同労働」の仕組みを活用して、元気で意欲のある高齢者による起業を促し、高齢者の働く場の創出や地域課題の解決、ひいては地域コミュニティの再生を図ることを目的として、平成26年度からモデル事業を実施している。

協同労働とは、働く意欲のある人々が集い、みんなで出資して経営に参画し、人と地域に役立つ仕事に取り組む労働形態のこと。

②事業内容

1) 「協同労働」プラットフォーム事業

ア) 実施方法

協同労働を活用した高齢者等の起業を支援するために、特定非営利活動法人ワーカーズコープへの業務委託により実施。

イ) 委託期間

2019年4月1日～2020年3月31日まで

ウ) 事業内容

- ・「協同労働」取組事例発表会の開催
- ・「協同労働」勉強会の開催
- ・社会的起業の中心となり得る高齢者（以下「地域中核人材」という。）の発掘と育成
- ・個別プロジェクト事業化支援（本事業による前年度以前からの継続支援分を含む。）
- ・事業化済の個別プロジェクト（前年度以前の立ち上げ支援事業補助金交付事業等）に対する支援
- ・関係機関等との連携と協働関係の構築
- ・事業実施報告書の作成と提出

2) 「協同労働」個別プロジェクト立ち上げ支援事業

プラットフォームの支援を受け、具体的な事業化の目途が立った団体を対象

に、外部有識者による評価（事業可能性検討会議）等を行った後、起業に要する経費に対し、起業済団体数（補助率1／2（上限100万円））を交付。

- 3) 事業費（令和元年度予算額） 25,053千円
- 内訳 ・「協同労働」プラットフォーム事業 19,873千円
 - ・「協同労働」個別プロジェクト立ち上げ支援事業 5,180千円

- 4) 起業済団体数及び補助金（令和元年7月31日現在）

起業済団体数19団体（224人）、補助金交付額7,217千円

- 内訳 H26年度：4団体、2,353千円
H27年度：3団体、1,403千円
H28年度：5団体、939千円
H29年度：2団体、908千円
H30年度：5団体、1,614千円

◎所感

- (1) 災害対応について

「平成30年7月豪雨災害における広島市の対応と今後の取組」を聞き、広島市の対応は平成11年6月災害（20名死亡）、平成26年災害（77名死亡）の反省と教訓をもとに進められたものであることが分かった。

現在、広島市が災害想定として避難場所の数、場所の見直しを進めているとのことで、危機管理意識の重要性を学ぶことができた。

- (2) 協同労働について

平成26年度に事業が開始された協同労働が、毎年新規に団体登録がなされている背景としては、地域やそこに暮らす人々のニーズ（需要）があり、問題を解決しようとする団体（供給）があることが前提となっている。

都市部から山間部まで幅広いエリアの中で地域によるニーズの違いに対応するボランティア意識を持った人たちが、地域の活性化を目指して立ち上がり、関連する団体とも連携を取りながら運営する広島市の取組は、東松山市においても参考となる。今後、元気で働く意欲を持った高齢者は更に増加し、その受け皿としての協同労働は、ボランティア要素も含まれ、依頼側と受け側共にメリットのあることを前提に、東松山市においても持続可能な方式を取り入れることが可能と思われる。

2. いじめ防止活動「ハートコンタクト」の取組について

視察場所 愛知県西尾市立東部中学校(生徒数約300人)

視察目的 市民クラブの目指す

「青少年を守る安全・安心のまちづくり～いじめゼロへの取組～」

視 察 者 大内一郎、岡村行雄、関口武雄、村田文一

対 応 者 稲垣校長先生、岡田教頭先生、杉浦先生（ハートコンタクト担当）

背 景 東部中学校では1994年11月、2年生の大河内清輝君(13才)が同級生のいじめを苦に自殺した。当時の在校生たちは、いじめ追放を目指す自主組織「ハートコンタクト」を結成した。

その活動は、25年を経た今なお受け継がれている。「ハートコンタクト＝ハーコン」のメンバーたちは、定期的にアンケートを実施したり、校内にいじめがないか情報交換したりしている。毎年11月には、いじめゼロを目指した「いじめ集会」を開催している。

※「いじめ集会（いじめについて考える集会）」は、学年別に行われる。

①「ハートコンタクト」の活動の様子は？

- ・毎月0(ゼロ)のつく日(10日・20日・30日)、ハートコンタクト・ルーム(＝ハーコン・ルーム)で、ハーコンメンバー(約50人)が給食を食べながら情報交換・情報共有をしている。

11月の「いじめ集会」前後は、毎日のように集まって企画を練っている。司会や書記をつとめた生徒たちは、「苦しかった。でも充実感。しかし、反省が残る」という表情を見せるほど、集会運営に真正面から挑戦している。

②「ハーコン」が25年に渡り受け継がれてきた理由は？

- ・ひとつの理由として、大河内君(生徒たちは大河内先輩と呼ぶ)が、手紙(遺書)を残してくれたおかげ。1年生は「いじめ集会」のあと、大河内君の遺書を読む。ある生徒は「今までいじめは悪いことだと知っていたけど、ここまで苦しいこととは知りませんでした。先輩の遺書を読んで、いじめは絶対にしてはいけないこと、ダメなことを再確認しました。先輩は、いじめられたことを遺書で包み隠さず伝えることができるほど勇気がある人なのに、それでも言うことができなかった。先輩の心が相当苦しかったんだと思います」と語っている。そして、「こんなことを絶対におこしちゃいけない」と強く感じる思いが、今なお「ハーコン」、そして、東部中学校の生徒たちに受け継がれている。

③25年前の在校生と、現在の生徒たちの心を「つなぐ」ものは？

- ・「隠さない姿勢」。オープンにして信頼を築く(隠しても不信感を生むだけ)。生徒たちは「それってイジメじゃないの?」と、自然に言葉にできる風土をつくらうとしている。隠さない姿勢こそ、今と25年前を「つなぐ」絆となっている。
(隠さない→見える→知る・わかる→代が変わっても受け継がれていく＝「つながる」)

④生徒たちは、どんな思いで「いじめ」と向き合っているのか？

- ・生徒たちは、全国各地で絶えない「いじめ」を、新聞・テレビ・ネット等で目にしている。そして「いじめは世の中からなくせるのかな?」と自問しながら、「ムリじゃないか」「0(ゼロ)は、とても難しい」「東部中にだって、イヤな思いをしている

子がいる」と自答している。そうやって、自分の内面を見つめ自分と対峙することで、自分を受け入れ自分の行動を変えようとしている。そして、(いじめ0のために)「隠しちゃいけない」「イヤな思いをさせちゃいけない」「社会に出てからも自分の行動に責任を持つ」という思いを育てている。「ハーコン」の生徒たちは、全国のいじめに触れるたびに、「ハーコンの活動が広がれば、いじめが減っていくのになあ」という思いを抱いている。

⑤毎年11月に「いじめについて考える集会」が開かれているが、生徒たちの声は？

- ・集会は各学年毎に開かれている。初めて「いじめ集会」に臨む1年生は、ハーコンの集計したアンケートを見て「実際に、この学年の中に『嫌だな』と感じた人が20%もいる」という現実を知る。そして、大河内君の遺書を聞いて「絶対にいじめを起こさない」と心に刻む。(②参照) 昨年、2年生は「心のカベをなくそう」というテーマで話し合いが始まった。その中で、「いやなことをイヤといえない子がいる。そうしたカベをなくしたい」という意見が出た。やはり昨年、3年生は「これからの私たちについて考えよう」というテーマで話し合い、「いじめを注意できるのが一番いいけど、相当な勇気じゃなきゃ、なかなかできないと思う。でも“怖いからやめよう”という考えだけは絶対にもちたくない」「卒業まで、そして卒業後も、いじめ0と向き合う」と、これからは見据えた。

⑥先生たちの指導上の工夫、気をつけている点は？

- ・メディアの「いじめ」情報を隠さず提供している。隠しては続けられない。「いじめ」とは、どこでも起こる可能性がある。教師も気がつかないことがある。だから皆で共有する。一人で抱え込まない、必ず言う。何があってもしゃべる。すると、子供たちからも教師が見抜けない情報を発信してくれる。「先生、SOSに気がついてよ」と。隠したって不信感がつのるだけ。隠しようがないのだから。

⑦校長先生の学校運営方針は？(お話は教頭先生も。⑥と重なる部分もある)

- ・いじめに限らず、風化を止める手段はなかなか難しいが、大切なことは隠さないこと。オープンにすること。誰かを傷つけることが無い限り、きちんと伝える。隠して、イヤな思いをさせてはいけない。生徒指導においては、子どもたちの自己肯定感を育むこと。自己肯定感とは、自分の感情を否定せず、そのまま受け入れるということ。そういった生徒が育つ学校環境をつくることこそが、東部中学校教師の使命と自覚している。(大河内君の)事件を風化させることなく、これからも学校づくりの中核に据える。

◎視察を終えて(所感)

大河内君自殺という辛い出来事から始まったこととはいえ、その悲しみを乗り越えて結成された生徒たちの自主組織「ハートコンタクト」を、25年の長きに渡り受け継いできた現在の生徒たちの「つなぐ」という思いに胸を打たれた。もちろん、活動を絶やさなかった背景にある先生方の熱心なご指導にも敬意を表する。

「いじめに大きいも小さいもない」と話す「ハートコンタクト」代表半田真凜さん(3年女子)の言葉には、まさに凜とした真摯な姿勢を感じる。(訪問当日は、お会いできなかったが)

あらためて、「つなぐ」「受け継ぐ」という強い思いの大切さを東部中学校の生徒さんたちから教えていただいた。心から感謝と御礼を申し上げたい。

加えて、東松山市議会・会派市民クラブの訪問依頼に対して、「断る理由はひとつもない」と言い切って下さった稲垣校長先生に対しても厚く敬意を表し、感謝申しあげたい。

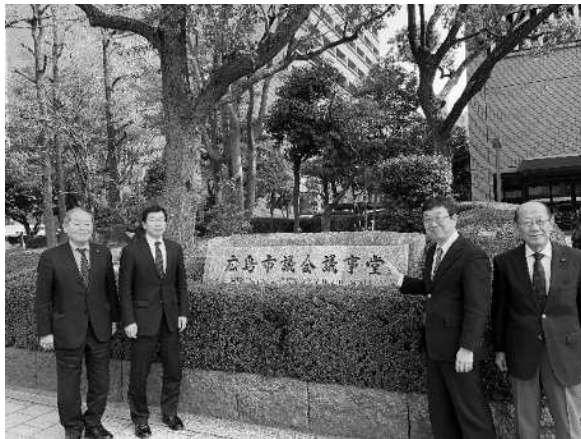
以上



広島市役所 会議室



広島市役所 会議室



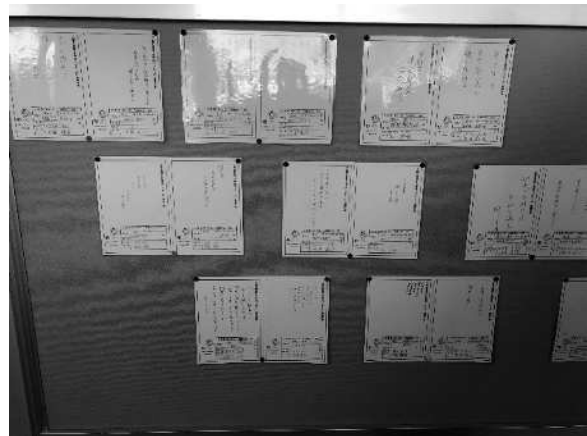
広島市議会議事堂前



東部中学校 廊下の掲示版



東部中学校 ハートコンタクト・ルーム



東部中学校 ハートコンタクト・ルーム



東部中学校 正門



東部中学校 校長先生・ご対応の先生方